

## 《大倉孫兵衛旧蔵錦絵画帖》の史的位罫

角田拓朗（神奈川県立歴史博物館）

《大倉孫兵衛旧蔵錦絵画帖》は、幕末から明治前半にかけて活躍した版元大倉孫兵衛（萬孫）が版行した錦絵をまとめた画帖である。現在、七冊が確認され、神奈川県立歴史博物館に寄託されている。2018年に同館にて初公開され、同年12月の美術史学会東支部大会にて工芸との関わりから本画帖の一端を発表者が報告したことがある。さらに2020年、本画帖をメインとする展覧会を発表者が企画担当して同館にて開催、その全容を紹介した。しかしながら、以上は簡単な考察や紹介にとどまっているため、本発表ではより詳細な作品研究を行うことによって、その史的位罫と存在意義を改めて明確にしたい。

考察は、以下の三つの手順で進める。第一に、本画帖群の概要と伝来、その状態について考察する。慶応3（1867）年から明治23（1890）年のあいだに版行された錦絵が貼り付けられた画帖は、版元孫兵衛が自らまとめ、ほとんど開け閉めされないまま伝わったと考えられる。その新鮮な色彩と彫摺の状態を確認することを本発表の起点とする。続いて、錦栄堂そして大倉書店へという近代出版業の展開との関係について考察する。同時代絵師から旧世代の絵師までを取り上げた画譜出版が、孫兵衛版行の錦絵展開にどのように作用したのか検討する。具体的には、画帖内部の史的展開として、「大日本物産図会」を代表とする組物へ移行する背景、新たな技術や表現の達成を明らかにする。最後に、森村組における製陶業への展開との関係について考察する。孫兵衛が製陶業のアートディレクターを務めたことを再確認しつつ、その存在をさらに浮き彫りにする。本画帖に含まれる輸出用錦絵を再考察し、『煤嶺百鳥画譜』『省亭花鳥画譜』などとの距離を考えてみたい。

そして本発表の結論として、以下の二点を主張したい。第一に、本画帖の鮮烈な色彩の美しさを確認することで、従来はさほど高い評価を得なかった「赤絵」の言説の再考が促されよう。明治錦絵の旧世代にあたる江戸期の摺り物、または後世代にあたる新版画を称揚するための方便として、明治錦絵全般が不当におとしめられていた可能性が浮上する。第二に、対米輸出を目的とした錦絵を考察することで、日欧関係を中心に語られがちなジャポニズムないしは19世紀後半の対外交流の研究領域に、改めて日米美術交流という軸を提示することが可能となる。以上の主張に加え、かつて指摘したように工芸史との密接な関係性も想起することで、《大倉孫兵衛旧蔵錦絵画帖》は19世紀美術史の豊かな結節点に位置するという、その存在意義が理解されることを期待する。